

芝八景

常磐津

全詞章

常磐津

六朵圖二葉 述

作曲者・初演年不詳

時津風枝を鳴さぬ君が代は、常磐堅磐に治まりて、栄え賑はふ大江戸の、名に竹芝の八景と、
節嬉しくも色変らぬ

契りは堅き愛宕山、その愛らしき頃よりも、年を数へて馴初めし、月の桂のまゆわたり
おもひあふ瀬は御浜沖

恋しき時はいとせめて、文の便りを松風の、琴柱にならぶ雁金も、誰におつると仇口に
夕潮満ちて潮留の、船に音聞く夜の雨

もるる浮名は高輪に、夕栄え照す紅葉葉の、燃る思ひや恋の闇
疑念晴らす晴嵐は、赤き心よ赤羽に、いつか五日の神かけて胸にいかりはないわいな

御鬪の札の辻占も、嬉しい縁縁山

〔三下り〕 入相ならぬかね言に、誓ひを三田の雪景色、積る怨みも打解けて、粹な粹な気性の
帰帆とは、岸にもとづく水馴棹、立つる櫓の末長く

わりなき中の楽しさは、芝浦かけて三津の朝、波間に群るる蘆田鶴の老せぬ齡幾千代も、
変らぬ松の常磐なる、斉こそ栄え久しけれ